

愛と復讐心／二マイル行く人

すでに学んだように「目には目を、歯には歯を」というオキテは、主イエスの時代の律法学者やファリサイ人らが解釈し教えたように、私的復讐や個人的恨みを是認するようなオキテとして与えられたものではなかった。むしろ、それはまず第1に、裁判における不正を防ぎ、公平と正義を確立するためのオキテであり、第2に、とどまることを知らない人間の復讐心を抑制する正義の規定として与えられたものであった。

殴られたら殴り返さなければ気が済まない、打たれたら打ち返さなければすまないのが私たちの性質である。そしてそれは、アダムから受け継いだすべての人間の本性であるといっている。しかし、主は、神の民とされた者はそうあってはならないとおっしゃった。たとい自分になされた、そのような不正や侮辱に対しても、キリスト者は、個人的恨みから仕返しをしようとしてはならず、むしろ、愛と忍耐と許しをもって隣人に対していくべきことを4つの例を挙げながら教えられた。

しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。(5:39～42)

右手の甲で相手の顔を打ち、返す手で左の頬を打つことは大きな侮辱を意味した。ユダヤの世界では、上着は質にとっても夕方には返さなければならぬ貴重なものであった。当時の伝令制度のもとでは、仕事中でも労働の徴用に応じなければならなかったという。

キリスト者とは、平手で頬を打ちつけてくるような他人の侮辱に対して、仕返しをしようとする思いを押さえて愛と忍耐をもって忍ぶことのできる人であり、自分に当然に属する上着、つまり権利が犯されるときでさえ、喜んでそれを放棄することのできる人であり、また、都合の悪いときでも、時には喜んで隣人の要求にこたえて、その人とともに二ミリオン行くことの出来る人である。そのような人であれ、と主は言われる。

或る注解者が適切にも語るように、「自分の当然為すべきことをしぶしぶやる人は“一マイル行く人”です。しかし、自分のやる必要のない分までも進んでやる人は“二マイル行く人”です。一マイル行く人が義務の人なら、二マイル行く人は愛の人です」。まさに主イエスの教えを言い当てている言葉である。キリスト者はそのように、愛に生きるように召されている。

使徒パウロも主の靈感を受けて、そのような愛と許しの心をもって生きることをこの世におけるキリスト者の基本として教え、コリントの信徒たちに次のように言う。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」(第1コリント13:4～7)。

そのような愛はどこから来るであろうか。それはイエス・キリストの十字架から滲み出て来る愛である。キリストの十字架の犠牲的な愛に生かされている者は、そのような愛の人に変えられるのである。